

令和8年度 第1回高校教育改革実行計画・先導拠点推進に係る有識者会議
議事録

- 1 日 時 令和8年9月3日(木) 午後2時00分開会
午後3時58分終了
- 2 会 場 Teams による web 会議(オンライン会議)
- 3 出席委員 戸部秀之氏(座長)、石田裕美氏(副座長)、
秋山佳子氏、奥平博一氏、田尻要氏、露久保美夏氏、萩原裕子
氏、原子一彦氏、星野和子氏、堀光美知子氏、宮本典行氏
(五十音順)
- 4 欠席委員 内田ひとみ氏、大石克紀氏、坂下真奈美氏、豊田清明氏
- 5 事務局 魅力ある高校づくり課、高校教育指導課
- 6 次 第 (1) 開会・挨拶
(2) 委員紹介
(3) 座長選出・副座長指名
(4) 協議
(5) 諸連絡・閉会

7 協議等

(1)座長選出・副座長指名

委員の推薦により、戸部委員が座長に就任。

座長の指名により、石田委員が副座長に就任。

(2)議事

戸部座長：それでは、議事に入る前に、本会議の公開・非公開について確認させていただきます。本有識者会議は、設置要綱第7条の規定により、公開となりますが、出席委員の3分の2以上の同意があった場合には非公開とすることができるものとされています。非公開とする御意見がありましたら挙手ボタンを押してください。

(挙手なし)

ありがとうございます。それでは、本日の会議は「公開」といたします。

また、本日の議事録につきましては、後日、事務局において取りまとめの上、皆様へ送付することとします。

それでは、次第に沿って議事を進めてまいります。事務局から本日の資料について、説明をお願いします。

事務局（田中課長）：（資料について説明）

戸部座長：各委員からの御意見をいただく前に、ただいまの説明に関する質問を受け付けます。御質問などがございましたら、挙手ボタンによりお知らせくださるようお願いいたします。こちらから指名させていただいた後、マイクをオンにして御発言ください。

（質疑なし）

戸部座長：それでは、委員の皆さまから御意見を伺えればと思います。多岐にわたる論点がございますので、委員の皆様からは様々な御意見を頂戴できればと考えております。一方で限られた時間でもございますので、できるだけ多くの御発言をいただくため、恐縮ではございますが、お一人5分程度を目安にお願いできればと思います。

名簿順に御発言をお願いしたいと存じますので、初めに秋山委員、お願いします。

秋山委員：はい。それではよろしくお願いいたします。お話を伺っていて、改めて大きな転換点にいるのだと感じております。どの高校現場でも、危機感を持って常に変革を進めなければならないと考えております。例えば施設設備あるいは人材の不足など、学校だけでは解決が難しいという現状がございます。一方で地域の方々をはじめ、いろいろな立場の方が高校を応援したいと考えてくださっていることもひしひしと感じておりますので、「高校単独での教育から県全体で学びを支える高校教育へ」とシフトしていけることをとてもありがたく、うれしく思っていてワクワクする思いがございます。その実現のためにも、また理念の共有ですとか、仕組み支援の具体策を入れた実行計画を策定していくことが大切だと考えております。いくつか、このようにできるとよいのではないかとおっしゃっていることをお話をさせていただきます。1つ目は複数の学校で共通科目を置くことです。生徒数が少なかったり、教えられる人が見つからなかったりするなど、学校単独では授業の開講が難しいということがよくございます。複数校で共通の学校設定科目を置いて、学校を超えて学び合えるような仕組みができると、同じ関心を持つ他校の仲間と出会って世界がより広がります。これは探究的な活動でも、あるいは教科横断的な学習でもできると思います。また、例えば部活動では、他の学校との合同練習や練習試合をよくやっていますが、そのような活動を通して技術を磨き、切磋琢磨して活躍の場を広げております。学習の分野で

もそのようなよさを取り入れていけるとよいのではないかと思います。また外部との連携ということでは、例えば私の勤務校では、開校以来、地元の施設の方に授業に入っていたり、生徒たちが近くの専門学校へ定期的に通って通年で授業を受けたりすることで、数字による評価は行わずに高校の単位として認定をし、生徒が充実した学びを得ております。実現のためのハードルはとてまたたくさんありますが、今後さらに、このような学校単独ではできない学びを広げていけるとよいのではないかと思います。また、遠隔授業やオンデマンドは今後必須になってまいりますし、それによって世界を広げられるというメリットは計り知れません。ただ一方で、リアルに人と交流してコミュニケーションをとり、人付き合いに悩んだり、ぶつかったりしながら成長していくという過程は、できる限り大切にしたいです。オンラインのメリットは十分感じていますが、コロナ禍でリアルな体験に大きな制約がかかった数年間とその後の生徒の様子を見ると、対面、リアルな場面をできる限り確保し続けるという視点も大切と感じております。また、不登校児童生徒数の増加は大きな課題です。不登校の原因は本当に様々ですので、教育相談的な対応に加えて、医療の力や、福祉の力が不可欠であると日々実感しております。高校での学習支援よりも前の段階、高校での学習に乘せるまでの支援がとても難しいという現状がございます。学校で手厚いサポートを行って、自分に自信を持って活躍できるようになったという生徒もたくさんおりますが、一方で高校卒業した後、これまでのように寄り添ってもらえなくなった、周囲の仲間は自分とは随分違った、というような理由で辞めてしまうというケースも残念ながらあります。だからこそ高校段階で次への接続が途切れないよう、高校側が支援していくことはもちろん大切ですけれども、同時に社会全体でいろいろな人がもう少し手を差し伸べて活躍できるというような環境も整っていった欲しいと思っております。最後になりますが、本県の高校は全国に先駆けて県全体で協調学習に取り組んでまいりました。今はもう当たり前のようになって、あまり話題に上がりませんが、これはやはり埼玉県の大きな財産だと思っております。計画に載せてください、ということではないのですが、埼玉県が策定する計画としては、このような強みを生かし続けるという意識を持つておくことも大切かと思っております。生徒はもちろん教職員も学校を支えてくださる皆様も夢を持って前へ進んでいけるような学校であり続けたいと思っておりますし、それを実現させる計画を策定し、推進していければと願っています。以上です。

戸部座長：続いて、石田委員、お願いします。

石田委員：私の大学は栄養学部ということで栄養学を専門としていますが、入

試の観点からみると、文系か理系かという、第3章の「改革の基本的な考え方」のところで示されている進路のモデルの転換が必要とあるとおり、文系的要素も理系的要素も必要な学問の分野です。高校生の段階で、文系か理系かの選択によって将来の方向性が分かれる傾向がありますが、専門性を高度化するには、総合的な学問領域も多いです。実際、これから求められる人材は、両方の側面の基本的な力を備えておくことが、いろいろな面での高度化に繋がっていくと思います。その意味で第3章に示されている「文系か理系かといった進路モデルの転換」は非常に重要と思っています。その上で、第4章に示されている、「実現に向けて中核となる3つの施策等」の1番目のところの、「専門高校の機能強化・高度化」は今後非常に重要になってくると思います。専門高校については、中学校からの高校選択のところで、本人がどのような方向性を学びたいと思うか、魅力を感じて進学するかを自分自身で考えていけるように、中学校と高校の接続の中で進路形成の道筋が県内で整備されることが望ましいと考えます。また、専門高校になりますと求められることがより高度化していくと考えられますが、その高度化の目標をどこに置くか、その先の社会、あるいは大学との接続の中で、高校で行うべきこと、その先で行うべきことを階層的に整理できるとそれぞれの教育段階の中でどういうことを展開すべきかがより明確になってくると思います。そうした中で、大学としては、より専門的な学びの魅力を、高校生、あるいは中学生も含めて、体験できるような、一緒に学べるような機会を県内で作っていかれたらと思っております。それからAIやデータサイエンスもこれから非常に重要であると認識しておりますが、データサイエンスの技術が高まったとしても、それをどう使うかという点では、データサイエンス単独ではなく他の分野との融合も非常に重要になってまいりますので、先ほど先生のお話にもあったように横断的に学べるような機会がとても重要になってくるのではないかと思います。現時点で思ったことをお伝えさせていただきました。

戸部座長：続いて、奥平委員、お願いします。

奥平委員：改めまして角川ドワンゴ学園の奥平でございます。よろしくお願いいたします。現在私どもは、N高を沖縄、S高はつくば（茨城）、R高は群馬と、3校の本校運営しております。デジタル技術を全面的に活用して、ネットの通信制高校として2016年に開校いたしました。現在は、全国の生徒がオンラインを活用して、個別最適な学習、自治体や企業と連携したプロジェクト型学習というものに取り組んでおります。またオンラインを中心とし、札幌から沖縄まで全国105の学習支援施設、いわゆるキャンパスを持っております。埼玉県には6つの学習支援施設、を有しております。その

ような状況で教育活動に取り組んでいる学校でございます。埼玉県は、非常にものづくり産業の集積地だと思っています。首都圏を支える非常に広域の物流の商業拠点や、さらに近郊農業に至るまで極めてある意味ではバランスのとれた、多層的な産業構造を有しておられる県だと思っています。また、すでに県内の高校でも、飯能高校さんでのDXハイスクール事業を見据えた先端技術探究をやっておられたり、秩父高校においてはすでに地域の地場産業や自治体と共同した、いわゆる地域課題研究に取り組んでおられたり、越谷北高校ではルーブリックの評価の試みなど、非常に地域産業と連動した素晴らしい取組をすでに実践されていると私は認識しております。こうした埼玉県の豊かな産業基盤、地元の取り組みとの連携というものをさらに今度の改革先導拠点校推進に向けて活用できないかなというのが私の大きな意見でございます。大きく3つポイントを申し上げたいと思っています。まず1つ目は、産業構造の変化に対応した個別最適化の学習と、何よりも教員の体制シフトです。AIや自動化が進む制度、物流現場と同様に、教育現場でAIドリルや学習管理システムで基礎知識の取得というものをさらに効率化すべきだと思っています。それによって教員を、知識を教える人から生徒に伴走する、いわゆるメンターやコーチの役割として変えていけるのではないかと考えています。やはり教員の活動にゆとりを持たせないと今の教員の組織体制では新しいことに取り組むのは厳しいと思っています。是非、そのように、教員が、今後の激変する社会に対応できるようにしていただきたいなと思っています。2点目は、地域の産業基盤と世界をつなぐオープンな教育空間です。埼玉県が誇る自動車などの様々な産業があります。いわゆる地域の現場とオンラインによる全国世界の先端知見を組み合わせるハイブリッド型の拠点というものを目指していただきたいと思っています。即戦力としてのキャリア感が生まれて変わるのではないかと考えています。もう1つは多様なチャレンジ実務能力を正当評価する仕組み、評価制度です。すでに越谷北高校で取り組んでおられるルーブリックや、ポートフォリオの評価の活用を拡大して、ペーパーテストのみならず、企業連携のプロジェクトでの成果物とか、試行錯誤したプロセスを、多角的に評価するシステムというものを先端のほうでは持っていただきたいと考えております。以上、私なりの意見を申し上げました。ありがとうございました。

戸部座長：続いて、田尻委員、お願いします。

田尻委員：ものづくり大学の田尻です。今の御説明をお受けしまして私どもの大学が行っているカリキュラムとの整合性といいますか、このお話の中で違和感なく聞かせてもらうことができました。一方で、非常にキラキラした言葉が非常に並んでいる印象です。それ自体はよいのですが、例えば今後人

口が少なくなるに向けて、地域のインフラ社会基盤などをどう維持していくか、人が生の生活を送る以上、この部分はどう維持していくか、ということは避けて通れません。これはデジタル技術が幾ら進んでも、結局避けて通れない部分です。この部分を外国人に全部頼るということであれば、それは特に問題はないかと思いますが、やはり日本人が、高度な技術できちんと維持していく、もちろん技術革新もありますので、そこら辺をどうフォローしていくかというところを考えますと、もう少しその部分として、埼玉県がその土地として、地域として人が暮らせる環境を維持していくにはどうすればいいのかという視点も入れておく必要があるかと思います。これは教育の枠を超えてしまうので、ここでの議論とは少し離れてしまうのかもしれませんが、それであればお許しください。今後、フィジカルAIができ、ほとんどの仕事はロボットなどがやってくれるようになるかもしれませんが、現場でどのように対応するか、というものについては、限界がまだまだ見えてきていない状況かと思っています。したがって、このことも、どこかで入れておいたほうがいいかと思います。これは、埼玉県という地域の行く末にかかってくると思います。教育がその育成にどのように関わっていくかということは別問題なのかもしれませんが、ぜひ理系を充実させるというようなことでございますので、やはり理系の中にはそのAIデジタルももちろんここは日本がこれから最先端として伸びていかなければならない場所ではあると思います。一方で生の生活があるということで選ばれる地域ということを考えますと、その辺の足元をしっかりと固めていく必要もあるのかと思います。ただ、全体的なこの御説明、お受けしまして、全く違和感なく、網羅されていて非常に効果的なプロセスかと思いました。以上です。

戸部座長：続いて、露久保委員、お願いします。

露久保委員：露久保です。御説明いただきまして、従来の「文系から理系か」というような進路モデルからの転換で文理横断的探究的な学びを充実させていくという方向性が、私も非常に重要だと感じております。主に3点お伝えさせていただきます。1点目が文理横断ですとか探究という考え方をこの学びの中で生徒が実感できる、実感しやすい具体的な題材に落とし込む、そのようなストーリーが見えるような案を作っていくことが重要ではないかということです。いただいた資料ですと、教科横断的な学習や探究活動によって学びが深まったと感じる生徒・教員が96.2%いるという一方で、データサイエンスの手法を用いた探究活動を実施した高校は14.8%にとどまるということが示されております。例えば、私が専門としている「食」という分野を例にしますと食は、科学、生物、物理といった理系分野だけで

なくて文化、地域、環境、健康、産業など様々な分野とも繋がっていきます。また、県では食料品製造やアグリテックやフードテックも持続可能な地域経済への効果が高い産業分野として挙げられています。そしてAIとかロボティクスといった先端分野も大事ですし、これから重要性もますます高まっていきますので、無視はできない重要な分野ですが、それに加えて、例えば、食というような非常に生徒自身に身近というような生活課題から科学、サイエンスとかデータサイエンスというところに入っていく探究活動も文理横断を考えるときの必要な1つの形かと考えています。生徒が実感できる身近な生活課題に目を向けるところからという入口も必要ではないかと考えます。主に、この1点目がお伝えしたいことです。2点目3点目は端的にお伝えさせていただきます。2点目は高大連携に関しては、できるだけ継続的な体制を見通した形にしたい。単発で大学の先生が来て、1回だけの講座やイベントではなく、資料に記載されているような、大学研究室の高校サテライト設置など、大学との連携が具体的に示されている点が非常に興味深いと思いました。単発でいろいろな方を呼んで、オムニバスの講座を受けることも興味を喚起する上では必要かもしれませんが、その一方で、継続的な取り組み活動ができるようにすることで、大学と高校、生徒たちとの繋がりというものが、より厚みを増していくような形ができると、探究の質が高まるのではないかと思います。3点目は、改革した後の成果を、「何を実施したか」や、「何人参加したか」という数や、人数だけではなく、「生徒がどう変わったか」という観点からの評価をしていくことが望ましいかと感じているところです。例えば、探究への興味がどう増したか、自分で課題を設定する力や根拠を持ってデータを考える力などがどのように変化したかということの評価し、それを検証する方法についても議論を重ね、ポジティブな効果が確認された場合には、その取組をモデル化して展開し、今後の裾野を広げていくことに利用できるようなデータの取得の仕方や、分析の仕方などについても、議論を重ねてもいいのかと感じたところです。私からは以上です。

戸部座長：続いて、萩原委員、お願いします。

萩原委員：はい。よろしくお願いします。私はこの資料を読ませていただいたときに、少子化がすごく進むというのを読んで一番思ったのが、今後も増加が予想される不登校の子供たちを取りこぼしていってしまうと、ものすごくもったいないことになる、ということです。日頃学校になかなか馴染めない子供たちと一緒に学んだり遊んだりしているのですが、その中にはすごく自分の興味関心を追求している子供たちがたくさんいます。普通に学校に小中高と行って大学に進学していく子供たちというのは、おそらくすご

く広い間口から広い分野の知識を学校で学んで、大学に行って、自分の興味のある分野でさらに深掘りして学びを深めていくという形かと思いますが、学校に行っていない子供たちというのは時間がすごくありますので、かなり自分と向き合う時間が長くて、自分の興味関心をすでに見つけている子がほとんどです。彼らはすごく狭い自分の興味という間口からどんどんどんどん深掘りしていきませんが、深掘りしていく中でどうしても様々な分野の知識が必要になってきますので、徐々にその狭い興味から入った探究学習のようなものがどんどん教科横断型に様々な分野の知識を吸収する方向へと広がっていくのをいつも目にしています。そのような子供たちがたくさんいる中で、学校につながれないまま大人になって、どのように自分の学んできたことを社会に活かしていけば良いかということがわからないままになってしまうことが一番もったいないと心配しています。小学校、中学校の時に学校に行かない子供たちも、高校からは復学したいと思っている子が大多数かと思います。高校から久しぶりに学校に戻ろうとするのですが、なかなか公立高校ですと、毎日決まったルーティーンがあり、好きなことだけ学べば良いという場所でもないですから、なかなかそこでモチベーションが続かないという子供たちが多いのではないかと感じています。今は通信制高校が増えましたし、学校に行けていない子供たちの学びの選択肢が広がったなとは思っていますが、普通高校に通うことを希望している子供たちもいますので、普通高校の中にも、そのような子供たちを受け入れられるような柔軟な学校があったらいいなと思っています。せっかくすごくモチベーションを持って学んできた子たちが、学校に戻った途端に与えられる課題をこなしていくということがメインになってしまうと、またモチベーションが見出せずに脱落していくということも起きるのかと思っているので、高校に入ってからでも、プロジェクト型の学びができるような時間があったらよいと思います。今、埼玉県内の私立高校の中には、自分の学びを深めるための時間が年間で何時間という形で学校から認められているような学校もありますが、そのような形で自分が築き上げてきた学びをもっと深めて、先生たちからフィードバックをもらって、最終的にはポートフォリオとしてまとめられるような、形に残るようなものがつくれたらその先の進路にも役に立つのかと思います。あとは高校に行って、専門分野のプロから学べたり、本物に触れられたりする機会があるとよいと思っています。また、プロジェクト型学習や探究学習のサポートについては、先生たちもどのように進めていけば良いのか学んでいる最中かなとは思っていますが、まずは外部からそのような分野に長けている講師を呼んできて、どのようにしたら効果的に学習を進められるか、先生たちも一緒に学んでいけたらよい

と思っています。もう一つ、これは学校に行っていない子だけにかかわらず、いろいろな周りの中学生の声も聞くのですけども、子供たちにとって学校の環境というものがすごく大事なのだということを最近感じています。例えば綺麗な校舎だったり、綺麗なトイレだったり、あとは制服がかわいいとか、そのようなことをすごく子供たちは見ていると感じます。それらは子供たちにとっては毎日のことなので、大人が想像する以上にすごく重要視していると思っています。そのような理由で私立を選ぶ子が多いというのは、子供たちの声からも聞こえていて、資金面でなかなか難しいところもあると思うのですが、できる限り子供たちが気持ちよく毎日を過ごせるような環境づくりということも、とても大事かと思いました。以上です。

戸部座長：続いて、原子委員、お願いします。

原子委員：戸田かけはし高等特別支援学校の原子でございます。私からは、多様な学びの保障の観点から、2点、意見を述べさせていただきたいと思います。1点目は、埼玉県では第4期埼玉県教育振興計画の策定に当たり、基本理念のもと、誰一人取り残されない共生社会の実現に向けた教育の推進について、計画の共通する視点の1つとしているということです。そこで、本県ではインクルーシブ教育システムの構築に向けた障害のある子供と障害のない子供がともに学ぶことを追求するとともに、小中学校における通常の学級と通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった連続性のある多様な学びの場の充実に取り組んできました。その1つとして、先ほどの挨拶の中でも申し上げましたが、本県では高校内の分校の整備に取り組んできたのだらうと思っています。平成20年に3校、その後、令和3年に1校、令和4年に3校をつくり、現在では13校の高校内分校が整備されてきました。同じ敷地内同じ校舎で学ぶことができる利点を生かし、交流及び共同学習に取り組んでいます。例えば体育祭、競技大会などの合同実施、分校の作業で行っているパンづくりを高校生が学ぶなど、そのような学校もあります。障害のある子供もない子供も互いに認め合い、尊重する大切さを学び、分校の生徒は自信を深め、高校生は分校生の頑張る姿から自分も頑張るという刺激をもらっているなど、大きな成果を上げていると伺っております。そこで、埼玉県でも、現在文科省で取り組んでいるインクルーシブな学校運営モデル事業を検討しても良いのかと思っています。これはインクルーシブで多様な教育的ニーズに柔軟に対応し、障害のある児童生徒の学びの場の連続性を高め、特別支援学校を含めた2校以上の学校を一体的に運営する事業です。障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が交流及び共同学習を発展的に進め、一緒に教育を受ける状況と柔軟な教育課程及び指導体制の実現を目指し、実証的な研究として成果報告も行われていま

す。計画の際は異なる教育課程を踏まえた柔軟な教員配置など校内体制についても研究・実施しているということです。そのため、例えば高校生が特別支援学校の授業を受けても、高等学校の単位について、特別支援学校教員でも単位認定ができるように、高校の教員も兼務するなど柔軟な体制を取り入れることもできるのかと思っています。今後、高校再編整備の中で同じ敷地内に特別支援学校も併置するなど、そのようなことから、柔軟な教育課程、柔軟な教員配置などを行うことによって様々な教育的ニーズに応じた対応をする高校ができるのではないのかと考えております。2点目です。埼玉県教育委員会が公開している資料によると、令和7年3月31日現在の数字ですが、中学校の特別支援学級で学んでいた生徒1,418人の進学先は、特別支援学校高等部には658人、全日制高校に166人、定時制高校に520人が進学しております。率にすると、全日制・定時制合わせて686人、48%が高等学校に進学しているという現状があります。そのようなことから、高等学校でも何らかの支援が必要な生徒が一定程度入学しているということになります。平成30年に高校における通級による指導が制度化され、本県では令和2年から本格的に導入されました。1つの例としては、自己理解や人間関係の形成、社会の中の自分などの学習内容を設定し、自分のことを知ること、リフレーミング、違う視点からの考えであるとか、1分間スピーチなど。生徒の感想の中では、自分のことを客観的に見ることができるようになったであるとか、かっとなることが減ってきた、悪いことばかりに目がいついていたけれど違う見方ができるようになったなどの効果があったという報告がありました。昨日ですが、通級を行っている高校のホームページを見てみました。残念だと感じたのが、これだけの効果を上げているのに、通級指導教室をやっていると、前面に書かれているページがなかったことです。指導に当たり、おそらく特別支援学校の自立活動の指導を取り入れていると考えるのですが、教育課程表で自立活動をお示しているものが見つけられなかったことです。一方、そのような高校では少人数制で学び直しを丁寧にやられている学校だということはよくわかりました。それに加えて、今お話したような特別な教育的ニーズに対応するための一人一人の状況に応じたカリキュラムを用意した高等学校があってもいいのではないかと感じました。以上でございます。

戸部座長：続いて、星野委員、お願いします。

星野委員：私は保護者の立場からと言いますか、地域の者からというところで、資料を、拝見させていただいて、何点か気になる点があったのですが、この改革では具体的にどのような学力層の生徒を想定しているのかというところが気になりました。AIとかDX、文理横断、高度な専門教育という言葉

が並んでいます。それが比較的学力の高い生徒をさらに伸ばすことを想定しているのか、それとも学力にかかわらず、県立高校に通う幅広い生徒を対象としているのかが少し見えにくいと思いました。保護者に説明する際に、魅力をどのように保護者が感じるかということが、少し気になると思いました。保護者からすると、この学校に入ったら自分、子供たちがどう成長できるのかということが学校の魅力に繋がると思います。先ほどコドモギルドの萩原さんもおっしゃっていたように、やはり子供たちの視点では、働けることを想定している子も確かにいるとは思いますが、周りの子供でもかなり学力の高い生徒も大学には行かないと選んでいる子もすでにいます。美容師になるから大学は行かず、専門的な技術を身に付け、手に職をつけたいという子供たちもいますし、まだ漠然としていてわからないから、会社員になりたいという子も確かにいます。先に対する不安が強すぎて、何か選ぶというよりも、どうしよう、とりあえず親に言われたからそうしよう、ということがすごく強いと感じる場面もあると思っています。多分AIという言葉は保護者の方もわかると思うのですが、DXとかデータサイエンス、探究などという言葉も並べても、「だからどうなんだ」となってしまう保護者もいるのではないかと思います。また、専門的な分野で考えますと、私立の中には、進学クラスがあったり、学力によっては食物科ですとか調理の資格を取れる学校とかもあったり、いろいろなことを学べる分野も、私立高校のほうが、先駆けてやっているのかと思っています。県立としてどういうところを視点として置いてくのかということが、先ほどなたかがおっしゃっていましたが、キラキラした話が多いということは、本当にそう感じています。やはり、一般的な保護者や生徒からすると、魅力とは何かを、もう少し具体的に考えたほうがよいのかと思いました。理系人材が不足するという将来の予測はすごくよくわかるのですが、そもそもなぜ子供たちが理系を選べないかという原因について、分析が少し見えにくいと思います。難しいや、言葉聞いただけで気持ち悪くなってしまうと言っている周りの子たちもたくさんいます。小学校の中でも理科離れとか、算数離れしており、各学校でいろいろなことを考えながら、どうしたら算数離れ、理科離れにならないかを考えて探究の授業で盛り込んでいる学校もあると感じています。またそれが中学校・高校に向かうときに、継続して学べるような学習方法が高校だけではなくその前から必要であると感じました。また、エッセンシャルワーカーの1つである看護師をしているのですが、AIに置き換えるということはすごく難しいかと思っています。高校教育でAIを使える力ではなく、人と関わる力とか考える力、判断する力も同じぐらい必要なのではないかと感じています。学校に行けない子供たちが、次のス

ページに進めるような、そういう子供たちを支える場面というのが今後もすごく必要ではないかと思いました。以上になります。

戸部座長：続いて、堀光委員、お願いします。

堀光委員：商工会議所連合会の堀光でございます。田中課長からの資料の説明、それから様々な立場で深く教育に携わっていらっしゃる委員の皆様からの御意見、大変貴重な御意見を聞かせていただきまして、勉強させていただいておるところでございます。そんな中、なかなかまとまった意見も言えないところかとは思いますが、いくつか状況のほうをお話しさせていただければと思います。まず県内の産業というか、事業所の状況ですけれども、やはり人手不足というのは顕著になっておりまして、高校生を毎年採用できていたような企業さんでも取れなくなってきたり、そのようなところは中途採用であったり、外国人の労働者の方に来ていただいたり、それからDXやAIなどで生産性を向上させて人手不足を補ったり、本当にいろいろ工夫を重ねて頑張っているという状況でございます。資料にもありますけれども、県内の高校生は埼玉県内で67%就職をされ、県外では東京に23%ぐらい行っています。それから大学も埼玉の高校生は東京の大学に半数以上が行っているというような状況が出ております。本当に埼玉県の特徴として東京の隣というところで、東京にかなり引っ張られるというか、取られてしまうというような状況があるかと思っています。今回の計画の中で、県全体で支えるという中に、当然、産業界・企業も入れていただいていると思います。ぜひそこは一緒に関わっていければと思います。やはり県内で頑張って教育を受け育ってきた方々が最終的にまた県内で活躍をしていただきたいというのが、非常に強く思うところでございます。高校卒業後に大学に行かれる方ももちろん、大学院も合わせると多いですけれども、いずれ親元というか、地元に戻りたいという形で戻って来ていただけるよう、高校のときから企業との連携したプログラムであったり、就業の体験であったり、そのような取組を入れていただいていますので、県内の企業の魅力を知っていただく機会を今後もっとますます設けていただいて、いずれまた県内で、人材の地産地消と言った方がいらっしゃいましたけれども、そのような形で、県内で活躍してくださる人材が育ってくれば良いと思っています。それから、個別の施策のところになりますけれども、第4章で最後に地理的アクセス、多様な学びの確保というところがございます。国のグランドデザインを見ましたら、主に地理的アクセスのことが語られているように感じたのですが、この埼玉県の計画には、多様な学びの確保というところが入っていて、とてもいいなと思って見ておりました。先ほども不登校の生徒さんを取りこぼすともったいないというような御意見もご

ございました。それから外国人の労働者、県内大変増えておりまして、労働者の方、当然県内での生活者でもございまして、お子さんたちも今後もおそらく増えてくると思いますので、このような日本語指導が必要な生徒たちに、多様な教育ニーズに応じたという項目を設けていただいていることをとてもうれしく思って拝見をしております。これに関連をしまして、「など」に入っているのかなと思うのですけれども、性の多様性に対する配慮、人権教育課が担当課さんに入っていますので、そのようなところも配慮には入ってくるのかと思いますけれども、性の多様性などマイノリティの方への配慮というようなところも1つ入ってくると嬉しいなと思います。それからもう1点、埼玉県の特徴として、男女の別学校、県立の別学校があるというところが1つあるかと思うのですが、これが多様な教育的ニーズというところに当たるのかどうか、ということもあるかもしれませんが、3年間という計画の中で、この別学校が今後どのようにしていくのかということも関心を持っているところでございまして、今後この計画に、ということではないのですけれども、共学がいいのか、男女別学というのも選択肢としてあってもいいのか、そのようなこともこのような機会にもう少し検討させていただいても良いのかと感じております。今のところは以上でございます。ありがとうございました。

戸部座長：続いて、宮本委員、お願いします。

宮本委員：まず初めにこのお話をいただいたりこの資料を見せていただいたりしたときに、当然のことながら埼玉県の公立高校の改革ということなのかと思っております。現実として、今、中学校が高校進学するにあたっては、授業料の無償化の話もありますが、それ以前から毎年毎年、私立の高校へ進学する生徒が増えております。ここに来て授業料の無償化があり、さらに拍車がかかっているという現状があるのかと思います。この子供たちを公立に引き戻すというわけではないですが、ぜひ公立に、ということもあるのかというところは感じているところです。中学校での進路指導、キャリア教育は、この変化の激しい社会の中では非常に重要になってくると思います。ただ単に高校に進学すればいいというような問題ではないと思っております。冒頭に、求める人材、それから育成する人材、ここをどのようにマッチングさせていくかというお話もあったかと思います。個人的な感想にもなりますが、中学校としましては、学習指導要領の改訂がまた迫っている中で、先日素案が発表されましたけども、これを中学校、小学校でやっていくとなると、今日の話にもありましたが、いわゆる人としての基盤というのでしょうか、人間としてというか人としてという部分が年々薄まっていってしまうのではないかと、非常に危惧をしております。それとは直接関係のないとこ

ろですが、埼玉県は皆さん御案内のとおり、非常に地域的に様々な地域があり、その地域ごとにニーズですとか課題とかが全然違うと思います。特に私がおります秩父地域におきましては、切実に少子化、人口減少、これが喫緊の課題となっています。北部地域全体でも小・中学校の統廃合が進んでいるという現状があります。一方、県の南部地域とか、南部だけではないかと思いますが、逆に人口が非常に増え、教室が足りないとか、あるいは外国にルーツのあるお子さんや外国籍のお子さんが非常に増えてきていて、今日もお話が出ていましたが、いわゆる日本語指導がとにかく追いつかない、日本語指導が追いつかないまま中学校を卒業しなければならないという現状があります。そのような子供たちを、高校で非常によく面倒見ていただいているわけですが、中学校では課題があります。それを踏まえて、この高校改革ということで、第4章で3つの施策というお話をお出しいただきました。まさにこれは本当に必要なところだと思っております。1つ目の専門高校の機能強化、高度化についてですが、自分の地域のお話をさせていただいては大変恐縮ですが、秩父地域におきまして製造業を中心に、非常に世界で活躍する企業がたくさんありますが、このことが子供たちにはあまり知られていない中で、本地域には実業系の専門高校、非常に伝統のある専門高校があります。実は、この専門高校に中学生たちが希望をなかなかしなくて、定員割れをしています。私たち地元の古い人間からすると、この学校が定員割れするというのは考えられない、というふうに非常に危機感を覚えております。地域の産業界でも、地域産業を支える人材を育成しなければならないと考えている中で、専門高校の機能強化、高度化、この方向性は非常に重要だと考えております。また、2つ目の普通科改革を通じた高校の特色ですが、こちらにつきましても、普通科の進学校と言われる伝統校があるのですが、やはりこの高校も、ここ数年定員を割るというような現状があります。やはり地元には伝統ある普通科高校、専門高校があるにもかかわらず、公立私立を含め、秩父の外に出ていってしまう中学生が多いという現状があります。やはり地元でちゃんと学べるのだよという、子供たちや家庭・保護者への安心感というのでしょうか、わざわざ遠くに行かなくても、お金をかけなくても、地元で学べるのだよ、地元で頑張れるのだよ、ということも非常に大事だと思います。そして、なんといっても3つ目の地理的アクセス・多様な学びの確保ですが、秩父地域は非常に厳しいところです。多様な学びについても、これは秩父地域だけではなくて、全県的、全国的の問題なのかと思っております。本校もそうですが、不登校がとにかく増えています。これは小学校も同様です。また、特別支援学級や特別に配慮を要する子供たちも非常に増えています。このような問題がどんどん低年齢化をしているという現状もあ

ります。かつては中学校の課題だったものが、今では、小学校の課題になっているということもありますので、私は中学校を代表して参加をさせていただいておりますが、小学校の意見ですとか、考えですとか、そのようなものも伺えるといいのかと、感じております。今日もお話がありました、不登校やほとんど学校に来られない子たちが、高校進学を機に、環境を変えて頑張りたいと思っているのは確かにそのとおりだと思います。それで成功している子もいれば、やはり最初に行っているが、続かないという現状もあります。公立高校でも、そのような子たちを受け入れる、あるいは、そのような子たちが学び直しをできるというような学校を、他県では実際にできていると聞きますが、埼玉県でもそのような高校があるといいのかと思っております。この3つの施策を見せさせていただきまして、まさにこれは、中学校が抱えている課題に対応する施策と考えますので、非常に心強いと思ったところです。高校でも、このように変わっていこうとしているということなので、中学校としても、そのことを踏まえながら教育活動を行っていかねければならないと感じているところでございます。以上でございます。

戸部座長：最後に、私から意見を述べさせていただきます。

皆様からたくさんの視点で御意見をいただきまして、私は本当にもうおなかいっぱいになっている状況ではありますが、少し私から、今までと違った視点を含めて、1点2点お話をさせていただきたいと思います。私は大学の経営に関わっていて、昨年度までは教育学部で教員養成に関わっていたこともありまして、今回の高校改革につきましては、大学として埼玉大学として本当に力を入れていくということを、学長をはじめ、我々執行部が、一致団結して思っているところでございます。その上で、どんなニーズがあるのだろうか、ということに加えて埼玉大学ではということではありませんが大学としてどんな環境を提供できるだろうかということについて、これはできる、これをして欲しいというニーズと、提供できることのすり合わせができると、とても良いのかと思っています。例えば、1・2・3とございますけれども、3の地理的アクセスであるとか、多様な学びの確保というのは、もう本当に目の前の、今すでに進行していることについての課題だと思います。待ったなしで始めなければいけない。今もう課題がもう本当に大変な状況になっているということになります。それに対して1と2はどちらかというと、2040年を見据えて、ということで少し将来に向けて、今からしっかりと準備をしていくという視点も含まれているのかと思っています。例えば3でいった方向性については、教育学部がありますし、心理とか、福祉であるとかの専門の大学がございまして、そこからそのような環境を提供できるだろうかということ、そしてどんな形で高校現

場とマッチングして、1回だけの取組でなくそれを歯車のようにまわしていけるかという環境づくりをしていければと思っているところでございます。そして、もう1つ言いますと、例えば本学では、実はダイバーシティ環境の社会実装と人材育成ということ旗印にして、今年度から大学改革を行って、いろいろ変わってきています。例えば工学部に女子枠ができたり、大学院にダイバーシティ科学専攻という深く学べるところができたり、教養学部には共生構想専修課程というのができたりして、いろんな専門的な人材を育成する環境ができています。そのようなところとリンクをしていくことも可能かと思っているところです。理工系、デジタル人材についても、本学の理学部、工学部の先生方は子供たちに何か伝えたいという気持ちがすごく強くあり、実際にいろいろな事業を進めています。そのようなものとうまくリンクができないかと思っていて、小学生、中学生、高校生相手にやっておりますので、おそらく興味深い、理工系への興味を喚起するような対応ができると思いますので、うまくつなげていけたらと思います。また、埼玉大学は1つのキャンパスに全部の学部、教養学部、経済学部、教育学部、工学部、理学部が全部ありますので、文理融合という意味ではすごくやりやすいというところで、それも、大学の旗印としてこれからさらに力を入れていくところです。どんな融合をして、それを子供たちにどのように伝えられるかということも、何かできるのではないかという気もしています。産業との関係ですとリスクリングについては非常に力を入れているところで、産業界と連携しておりますけど、それが大学、産業そして教育へとつなげていけたら、さらに良いかと思っています。学校の先生方の「リスクリング」、「資質向上」、先生方が楽しく子供たちに教える教材づくりに関わらせてもらうとか、そのようなことも可能かと思っています。いろいろ言いましたが、そのような繋がりをプラットフォームとして我々は考えています。県内の大学もそうですし、産業界もそうですし、様々な繋がりをプラットフォームのようにして作り上げ、それらがしっかりかみ合って動いていく、そのようなシステムができればと思っています。県内の高校の多様なニーズということもございますし、国からの方向性も示されておりますけれども、いろいろなパッケージを県内の高校に示すことができ、これは面白い、というものを選択できるような環境ができたなら、楽しく学べる環境はできていくと期待を持っているところです。埼玉大学、本学のことが中心になってしまいましたけども、そのように考えているところです。

さて、一通り委員の皆様から御意見をいただきましたが、他の委員の御意見をお聞きになって、追加の御意見や御助言等がございましたら御発言をお願いいたします。

萩原委員：今お話を伺って少し思ったのですが、高校生が、この先の進路を考えるとときに、実際に大学生のお話を生の声を聞けると良いと思いました。それに関しては、中学生も高校生の声をもっと聞けたら良いと思っていて、私も看護師として、大学の医務室で働いているのですけども、その大学に入るということを目的にして入ってくるのが、思っていたのと違うということで、入ってみた方がいいが、モチベーションがゼロのようになってしまい、学校を続けていくことが難しいという子供たちをたくさん見えています。それは、高校から大学に入るときもそうですし、中学から高校に入るときもそうだと思うのですけど、入った後に本当にその子の、その子らしさが発揮できるような、自分の興味関心のあるところに入って接続していけるために、実際にそこにいる人たちの声をもっともっと聞く機会があったら良いと思いました。もちろん、学校見学などがありますので、そのような機会は設けられているとは思いますが、もっと日常的に、大学生が高校に来てくれるとか、高校生が中学校に来てくれるとか、もっと交流する機会があれば、もっと子供たちが自分の進路に興味が湧くかと思いました。

星野委員：ちょっと話ずれてしまうかもしれないのですけれども、確かに多様な学びというところで、娘が「彩の国かがやき（彩の国かがやき教師塾）」で、小学校でボランティア活動をさせていただいているのですけれども、小学校の先生方は、かなりやることが多く、本当に猫の手も借りたいぐらいです。埼玉県は本当に、教員になる方が少ない状況だというのは、小学校で、PTA会長を6年間やっていて、先生方のお手伝いをしながら、すごく感じています。大学でも、いざ先生になってみても結構辞めてしまわれる方とか、お休みされてしまう方がたくさんいると思っているので、大学にいる間から、もっともっと学校に、ボランティアという形で、単位が取れるような形で、派遣の方ができるような形でつなげていくことが、必要ではないかと思っています。学校側としても、学生からしても、すごく大事ではないかと思っています。学生の時期から教育学科で、キラキラした学校について学んできた中で、現場を知ると、現実はこののだと、わかることがたくさんあるのかと思いました。また、「彩の国かがやき（彩の国かがやき教師塾）」で知り合った埼玉大学の生徒さんとも一緒に埼玉大学で学ぶことができるとか、大学生は本当に世界が広がっていくかと思うので、そのような魅力も高校でも伝えていくとか、そのような大学づくりということが、大学はそういうことをしている、ということが高校の時からわかると子供たちの職業にもかなり影響していくのではないかと思います。ぜひ埼玉県でそのように先生たちを助けるという意味でも、今後、教員になるような、子供たちを助けていけるような制度も必要だと思います。付随して、理系の分野とは、どのよ

うなものがあるというのを学びに行くことができるとか、高校の時点から見に行くことができるということもすごく大事かと、皆さんのお話を聞いていてすごく思いましたし、提案していければと思いました。以上です。

戸部座長：委員の皆様、本日は大変貴重な御意見・御助言をいただき、ありがとうございました。事務局におかれましては、各委員からいただきました御意見・御助言を計画案作成に生かしていただければと思います。また、各委員におかれましては、次回の会議におきましても引き続き、御意見・御助言を頂戴できれば幸いです。

8 欠席委員からの御意見

内田委員：第2章「高校教育を取り巻く社会的な状況」における、職種間の需給ミスマッチは興味深く、生産工程技術者はマイナスではあるものの、現場人材は全国から見るとプラスになっている。つまりその人材を生み出すことができているのか、たまたまなのか、そうでないのか、深堀が必要なのではと感じた。AI技術者にフォーカスされがちだが、実際に現場を支える人材の需要は今後も大きく減少しないと思うためである。卸売業などを活況にしている倉庫業などが多い埼玉県の地政学的な面も一部背景にあるのではないかと個人的には推測している。また、第3章「高校改革の基本的な考え方と方向性」は概ね賛成であるし、第4章との連動も一見するとよく描けている様に見えるが、第5章と連動している様には見えない。変化する社会で活躍し続ける『力』とは何か。についてなどの深堀がなく、いきなり手法に落ちているように見える。昨今言われているように、先日の調査でも日本は『好奇心』『主体性』が諸外国に比べて極めて低く、数学などの知能は高いという結果があったと思う。内向きになりがちな思考をどのように突破させるのか。いきなり、企業との連携という文字が躍るのは違和感がある。その前にどのような人材を育てていきたいのか。についての言及が必要であると個人的には感じた。

大石委員：まず、今回の骨子案が、人口減少や人材需給のミスマッチを的確に捉え、専門高校の高度化だけでなく、普通科を含めて文理横断的、実践的な学びへ転換していこうとしていることには、大いに賛同いたします。因みに、弊会が会員企業を対象に実施したアンケートでは、75.9%の企業が人手不足と回答しており、人材確保は多くの企業に共通する喫緊かつ恒常的な

課題となっております。そのような観点からも、高校生や大学生に県内企業の魅力や仕事を知ってもらい、県内企業を将来の進路の有力な選択肢として認識してもらう取組は、大変重要であると考えます。すでに埼玉県では企業と高校生との交流会なども実施しておりますが、インターンシップの更なる充実とあわせ、企業と生徒・学生との接点を増やす取組を一層加速していく必要があると思います。教育局においては、県内経済6団体との協定締結など、これまでも経済界との関係を構築していただいておりますが、今後さらに企業、大学、地域など、幅広いステークホルダーとの連携を深めていただくことを期待しております。また、こうした改革を実際に担う教員を取り巻く環境整備も非常に重要です。教員が生徒一人一人と向き合い、社会の変化を踏まえた質の高い教育を実践できるよう、働き方改革を進めるとともに、研修の充実などを通じた資質・能力の向上にも、しっかり取り組んでいただきたいと思います。高校教育改革が、未来の埼玉を担う人材の育成と地域経済の持続的な発展につながるよう、今回示された取組が着実に実行されることを期待しております。

坂下委員：私の子供は、総合学科の滑川総合高校に通っていました。最初、総合学科と普通科高校の違いからよくわからない現状でした。このことは、多くの保護者さんからの声もよく聴きます。専門的に学ぶというより、総合学科は、この分野の職に進みたいという将来を見据えてそれに必要なコース等を選択して選ぶことが多く考えられます。何かしら、「将来この職に」と考えている子以外の保護者の方々は、総合学科に通わせる意味がわからないと考えています。これが、総合学科がなかなか浸透しにくい要因になのかもしれないかもしれません。そのような考えがない子は通ってはいけないと考えられているのかもしれないかもしれません。最近、徐々にいろいろな学科を学ぶ事で、将来どのような職、専門、大学に導きだせるかと考え、選ばれる傾向になってきています。昨今、子と親の距離がとても近いということもあるので、これからの高校教育は、子も親も共に理解して、共に育っていける環境があるといいのかと考えます。入学後、総合学科はコースごとの説明、またはより詳しい説明などには、親と子が同席し、その後コース選択をしていくといいと考えます。そのようにすることで、親子の不安が取り除けるのではないかと思います。私立無償化などにより県立高校への入学が極めて少なくなってきました。県立高校に少しでも多くの方に入学してもらう為にも事前説明に力を入れることや各学校の施設内の修繕等もしていく必要があると思います。さらに、「この先生に教えてもらいたい」など、レベルの高い専門的な人材の採用、育成なども良いと考えています。分野ごとに優れている人材が

教壇に立つことも良いのかと思います。

豊田委員：第1章については、1.趣旨、2.位置づけ、3.期間、4.経緯について、必要なことが整理され、記載されている。「策定までのスケジュール（想定）」は大まかな日程（年・月）については出来るだけ早く記載したほうがよいのではないか。第2章については、客観的なデータを踏まえて丁寧に検討・分析され、明確に記載されている。第3章については、記載内容は適切であると考えている。第4章については、具体的な取組内容が不明であるため、軽々に意見を述べることは難しい。実際にこれらの施策を進めるにあたっては、先導拠点校の校長の意見を丁寧に聞き、その上でサポートすることが必要であると考えている。特に、①の3つ目の「長期インターンシップ等」、②の1つ目の「大学研究室の高校サテライト設置」については、先導拠点校の実情を十分に踏まえて取組を進めることが大切である。「大学研究室の高校サテライト設置」は「大学の研究室体験」などのように幅広の表現の方が、高校・大学双方とも柔軟な対応ができるように考える。第5章については、②教育環境の整備・教師を取り巻く環境整備について教育環境の整備という観点であれば、教師だけでなく、実習助手や事務職員についての記載があってもよいのではないだろうか。その他として6点記載する。1点目、多くの大学は、研究・授業の他に地域・社会貢献に関しても力を入れ始めていると思う。いくつかの大学は、埼玉県高校教育改革実行計画骨子案に示された取組等に様々な点でサポートできると考える。これからの日本や世界を担う人材の育成のために、県、県教委、企業、大学等が力を合わせ、知恵を出し合い、具体的な取組を進めていくことが大切である。2点目、大学や企業等は人や施設など、様々な資源を有している。特に県や県教委と様々な関係で連携している関係機関等へは当該計画を示し、今後、協力依頼を進めてはどうか。その中で、新たな視点、アイデアも出て来るのではないか。3点目、今後、先導拠点校を中心として、関係する複数の高校と複数の大学・企業が連携・協力し、今回の取組について具体的かつ柔軟に進めていくことも考えてはどうか。4点目、県教委等は、保護者に対しても、今回の計画を含め、国や県の動きを周知し、理解と協力を得るよう努めることが大切である。2040年へ向けた諸課題の解決、特に理工系人材の育成には、保護者の理解が必要である。5点目、日本では、中学生くらいまでは、数学や科学リテラシーが高いが、高校・大学と進むにつれて理工系分野を学ぶ女子が減少する状況にあると言われる。その背景にあると考えられる社会のバイアスを変化させるために、県や県教委は今後、さらに工夫を凝らした情報発信が必要と考える。6点目、いわゆる「ネクストハイスクール事業」先導拠点校に

「埼玉県高校教育改革実行計画」を示す際、十分にコミュニケーションをとりながら、丁寧に説明し、理解を得ながら、計画を進めることが大切である。